社　会　科

澤　田　兼　祐
泊　　和　寿

1　社会科における学びを豊かにする聞き合い

本校の社会科の目標は，一人一人が様々な社会事象に理解を深め，それらを場面に応じた適切な判断によって整理・統合する考え方を身につけられるようにすることである。考え方を身につける際，子どもが知る社会事象をきっかけに学びを深めていく。しかし，子どもが知る社会事象には個人差がある。生活する地域の特徴や家族の生活スタイルに違いにより，経験に違いが生じるからである。また，同じ事象について語る場合でも，個々の子どもが重視し，どの観点から語るかによって，そこから得られる理解には違いが見られる。事象についてどの見方で判断するかについては，個々の独自性が表れるからである。

本校では，子どもが上記の目的に近づくために聞き合いを重視してきた。問題に対して子どもがそれぞれの知る事実を数多く出し合うことで，事実の共有をしてきた。その際には，自らが知る事実やもつ考えと他の子どもが語る事実などとの共通点や相違点を探ったり，初めて聞く事実に驚きや疑問を抱きながら聞いたりしていた。事実について共に出し合う根拠を意識して聞くと，同じ事実が違う根拠になり得ることに気づくことができる。また，事実に対する見方を他の事実に転用することで，事実のもつ意味を類推して理解することができるようになる。子ども自らがどのような見方や考え方で事象をとらえているのか認識できるようになることで，多角的な見方や考え方で社会事象をとらえられるようになるのである。そのような多角的な見方や考え方で社会事象をとらえることが，社会事象が示す具体的事実を知るだけでなく，事実を広範に包含する概念を知る学びにつながる。

このように，子ども同士がそれぞれの知る事実を話したり，事実に対する見方や考え方を出し合ったりすることで，個々がもつ事実認識を深め，概念を含む社会認識の理解に至る。そのように，自らの考えをより説得力のあるものに再構成していくことを「学びが豊かになる」ととらえる。

以上から，社会科のめざす子どもの聞き合いの姿を次のように設定する。

問題解決にすすんで向かう中で　互いの考えを出し合い　自らの考えを多角的な見方や考え方で　関係づけ再構成をしていく聞き合い

2　聞き合いのために

(1)　子どもにつけたい態度

事実を深めようとする態度が必要である。個々が知る事実には差があったり，気付いていない事実があったりする。多くの事実を知りたい，収集したいとする態度が，子ども同士が聞き合いを求める姿勢につながる。そして，お互いが知る事実を出し合うことで，事実の共有につながり，確かな事実認識を得られるようになる。

加えて，問題意識をもち続ける態度が必要である。問題解決に至る原動力は疑問をもつことと，それを解決しようとする追究意欲をもち続けることにある。問題に対して自らの考えをもったとしても，その考えが最善のものかどうか問い続け，さらに多くの事実や多様な考えに触れてより説得力のある考えに変える必要がないか見直すことが，より説得力のある考えに至ることにつながる。

社会科授業には，見学やインタビューなど実際に子どもが体験できるものと，資料集などのそうでないものがある。どちらの場合でも，子どもが知った事実と気付きを出し合うことを重視していく。

(2) 子どもに共有させておきたいこと

広範な視点から事実をとらえなおす見方のよさを知っていることが大切である。子どもが課題解決に向かうときに初めに出会う事実は，数多くの社会事象のうちの一つの断面でしかない。それをきっかけとして，関連する多くの事実を探したり，どうしてなのか原因を探ったりする。それらの活動を通して，子どもは初めに知った事実をより広範な視点からとらえることに至る。

そのように広範な視点から物事をとらえることで，事実認識を社会認識に高めることができると考える。

(3) 実生活に生かす発展的な活動

教科で学んだことは実生活で生かして初めて次の学びへの意欲へとつながる。しかし，学習内容をそのまま身近な生活に生かすことは容易なことではない。知識として得たことが，実生活と密接な関係にあるととらえることは，それを意図した授業なくしては難しい。具体的事実習得だけに留まらない応用力をもった考え方を身につけさせることで，自分の立場では，全体のためにどんな行動ができるかを考える公民的資質の醸成につなげていく。

(4) 多角的な見方・考え方の必要感を引き出す課題設定をする

子どもが意欲的に学習に向かう時には，考えの違いに触れられることが大切である。様々な視点から見方ができ，そこから複数の考えが予想される課題を自分たちの疑問から見出すようにすることで，聞き合いが促進されると考える。

3 関係づけ再構成する手だて

(1) 事実がもつ意味について考えさせる

授業で子どもが知っていたり，気付いたりしている事実について語る。このとき，同時にその事実が問題解決にどのように役立つのか，またはどのような意味をもつ事実だから問題を解決することに役立つと考えたのかという，語り手の価値判断も共に伝えられる。根拠も合わせて聞くことで，どの点に価値をおいて事実をとらえているかをお互いが知り，自分の判断と比べることができる。

そのような学習活動をくり返すことで，聞き手である子どもは既知の事実を違った根拠や判断によってとらえなおすことができるようになる。授業で知る新しい事実に興味を深めるだけでなく，既知の事実をとらえなおすことでより幅広く事実を知ることができる。この事実を多角的にとらえ，とらえたこと同士を関係づけることが，事実の意味を深く理解する活動となる。

(2) 観点を明確にして，話をさせる

自分の考えをどのような観点から考えたものか見直すことで，自分の考えを俯瞰するような位置からとらえなおすことができる。すると，他の子どもの考えを聞いたときに，自分の時と同様にどの観点で見て考えたのか関係づけ，他の問題で複数の観点から一つの観点を選び，考えを再構成する。こうすることで，複数の観点から課題に対する考えを得ようとする姿勢につながると考える。

(3) 考えを比較して，よりよい選択をさせる

授業で知る様々な事実についてのとらえをお互いに出し合うことで，同じ根拠であっても決定する行動や活動が，異なるものであると気付くことがある。これは，個々の子どもが判断する価値基準が異なることが原因であると考える。それは，どの価値を重視し判断することが，問題を解決するためのよりよい選択につながるのかを考える機会になる。個々に互いの考えを比較させることで関係づけ，どの選択がよりよいのか判断し直し，最善の選択をさせることにより再構成させる。これらにより，自分の考えに自信を深めさせ，より自信をもって判断ができる子どもを育てると考える。

4　実践例

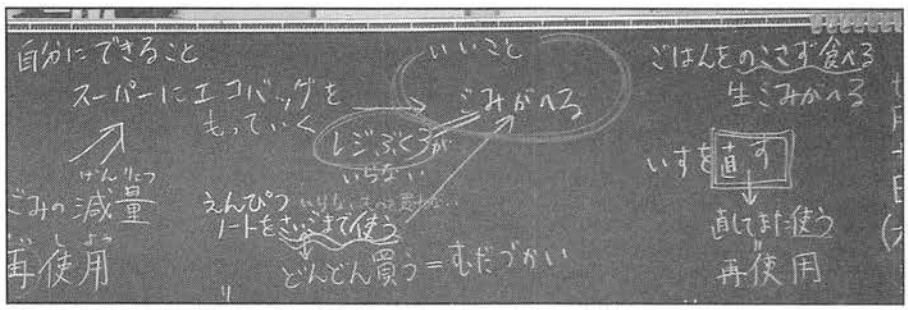
(1)　事実がもつ意味について考えさせる

①　3，4年複式「ごみのゆくえは，どうなっているの」

3次で，学習のまとめを作った後に，そのまとめをもとにして授業を行った。学習のまとめでは“ごみの減量のため，自分たちにどんなことができるか”を書いた。多くの子どものまとめに“3R運動をしよう”とあったが，3R運動によってどのような効果が上がるのかの理解については，まとめや発言から判断すると不足していると感じた。そこで3R運動という事実が，どうしてごみの減量に役立つのか，言葉のもつ意味を身近な活動と関連させて理解する授業を行った。学習問題は＜3R運動でどんないいことがあるのだろう？＞とし，既習であるまとめをして得た考えと環境エネルギーセンター等の見学で知ったこと，家庭で取り組んでいるごみの減量のために自分たちがしていることを関係づけた。

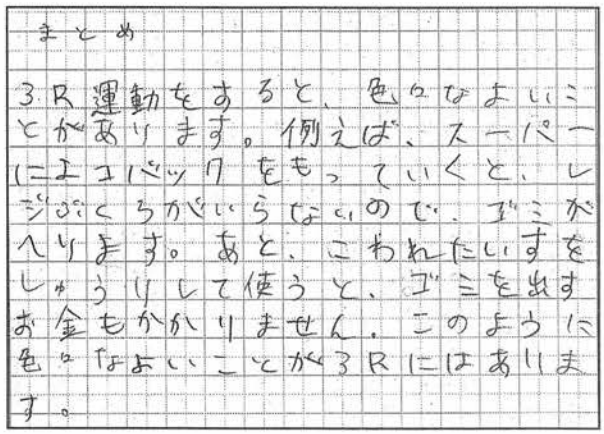
学習では，具体的に示される活動と結果を話した。例えば，リデュースに関しては，“必要のないものをもらわない・買わない”ことが，どのように社会に好影響を与えるかを考えた。子どもがまとめをふり返り，まず思い出した活動は“マイバッグをもって買い物に行く”という事例であった。それがいかにごみの減量につながるのか気付きを出し合った。

話し合いでは，マイバッグをもっていくことでレジ袋をもらわなくて済むようになり，品物を入れて持ち帰ったあとで捨てるレジ袋がなくなる分，ごみの減量が進むというつながりを確認して共有できた。また，多くの人がマイバッグをもっていくことで，多量のごみの減量につながっていくことも確認できた（資料1）。



資料1　矢印を用い 活動と結果をつないだ板書

この授業では，他に“鉛筆を最後まで使う”事例についても考えた。これが子どもにとっては身近な事例であり，これが多くの子どもが共感をしたリデュースの行動であった。この事例でも気付きをつなげて発表していった。鉛筆を短くなるまで使うことが，どんどん新しいものを買わないことにつながり，その無駄遣いをしない行動もごみの減量につながること，マイバッグと同様に一人一人が短くなるまで鉛筆を使うことが大切だと確認ができた。



まとめ

3R運動をすると、色々なよいことがあります。例えば、スーパーにエコバックをもっていくと、レジぶくろがいらないので、ゴミがへります。あと、こわれたいすをしゅうりして使うと、ゴミを出すお金もかかりません。このように色々なよいことが3Rにはあります。

資料2　学習で理解した つながりの記述が見られる子どものまとめ

子どもたちがわかったと認識していることの中には，その言葉・活動の価値に気づかず，その言葉だけキーワードとして覚えている場合がある。その時，言葉が示す活動の目的を明確にする聞き合いをすることで，学んだことを自分たちの生活に密着した身近なものとしてとらえさせることにつながった。そのように話し合うことで，社会全体とそこに所属する自分の関係について考えることにつながる。子どもが意欲的に気付きを出し合う活動を喚起し，積極的な話し合いの中で学習内容の理解を深める聞き合いをす

ることで，事実がもつ価値について理解することができた（資料２）。

② ５年　「日本に生活するということ」

低地，高地に続いて，暖かい地方のくらしの様子についての学習の学習を行った。導入にて，写真資料「那覇市の住宅」（資料３）を提示した。

子どもは，写真の住宅の様子について，既習である南西諸島の気候とつなげて発言していった。

子どもは，那覇市の住宅が「屋根が平ら」であることと，「どの家にも給水タンクがある」という二つの事実（特徴）に着目した。

資料３　那覇市の住宅

屋根が平らなのは何故か。どの家にも給水タンクがあるのは何故か。子どもは，二つの事実を、那覇市が南西諸島の気候であることとつなげて考えていった。

二つの事実がもつ意味についての考えが入り混じりながら発言され，関係づけられていった（資料４）。

C1 ： どの家にも給水タンクがあります。
C2 ： 暖かい地域だから三角屋根じゃなくて平らな屋根になっています。
C3 ： それは水をためるタンクで，降水量が少ないんだと思います。
T ： 屋根に気付いた人がいたね。乗っているはずのものがのっていない…
C4 ： 瓦！
C4 ： 台風が来るから，瓦が危ないから平らな屋根なんだと思います。
T ： どうして危ないの？
C5 ： 瓦が飛ばされるからです。
T ： 瓦がないところが台風対策だと思ったんだね。

資料４　二つの事実がもつ意味について話し合う

その結果，子どもは，屋根が平らな理由には納得したが，どの家にも給水タンクがある理由は矛盾があり，説明ができないことに気がついていった。南西諸島の気候は年間を通して降水量が多い。にもかかわらず，那覇市では，水不足対策と思われる給水タンクが，どの家にも設置されているのがおかしいというのである。

事実の持つ意味について考えれば考えるほど，疑問は深まっていった（資料５）。

T ： 那覇市の気候は？
C1 ： 南西諸島の気候。
T ： どんな気候だと言えますか？
C2 ： 一年中平均気温が高くて，降水量が多いです。
T ： 那覇市の気候と家の様子を比べてみて気がついたことはありませんか。
C3 ： なんで，給水タンクがあるの？
C4 ： 降水量が多かったら水不足にならないから，給水タンクはいらないんじゃない？
T ： なんでそう思うの？
C5 ： 降水量が多いから，水が多くて豊かなはず。

資料５　考えるほど疑問は深まる

既習への矛盾を含む資料を提示することにより，資料から読み取れる事実のもつ意味について，子どもから様々な思いや考えを引き出し，関係づけることができた。

(2) 観点を明確にして，話をさせる

① 3，4年複式「水道の水は，どこからくるの」

2次で，金沢市の下水道の普及について学習をした。学習問題を＜金沢市で下水道はどのように広がっていったのか＞とし，下水道の普及を資料から読み取った。

T：のびゆく金沢 112 ページのグラフと地図から，問題について考えましょう。

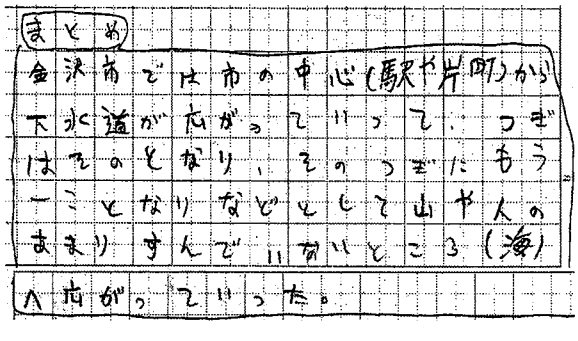
A児：地図の中心の金沢駅を中心に広がっていますね。それは，駅の近くの人が作り始めていて，その周りの人たちが「作ってください。」と言っていくことで，円をかくように広がっていきました。

B児：金沢駅あたりから，広がっていますね。金沢駅から何年か過ぎるに連れて広がっていると分かります。

C児：下水管の伸び方のグラフで，前は 30km しかなかったのに，昭和 50 年・60 年になってぐぐっと伸びてきましたね。金沢駅や香林坊から広がっているのは，人が多く住んでいる所から広がって，山の方は人があまり住んでいないからあとに広がったのだと思います。

D児：C児と似ていて，昭和 37～48 年は金沢の中心で，そしてだんだん山の方まで広がっていったから，中心からどんどん広がっていったと思います。

資料６　複数の立場から得た考えが述べられたことが分かる授業記録



資料７　複数の資料からわかったことを書いたまとめ

主に用いたのは，“のびゆく金沢”の金沢市の下水道普及計画を表した資料である。年代によって色分けされている資料で，多くの金沢市民の生活に下水道が普及していった様子を読み取ることができる。授業では，これと共に，金沢市の人口分布を示したグラフや標高を示した地図も関係させて，話し合いを進めた。最初の資料は金沢市の施策を表した資料であり，二つ目は，居住地から人々の生活が考えられる資料である。「市の施策から社会全体を考える」観点から考え，居住地を示す資料からは，「人々の生活」という身近な観点から事実を考えることができる。資料を読み取った二つの観点から得た気付きを関係づけることで，金沢市がどのように下水道の普及を進めていったのかが理解できると考えた。

授業では子どもが複数の資料を関係させながら考えを深めていった様子が分かる（資料６）。A児とB児が述べていることは，下水道普及計画の資料から読み取ることができた金沢市の施策である。それに対してC児とD児は，市民がどこに住んでいるか読み取ったことや既習の町の様子で知った知識を交えて述べている。違う観点から読み取ることができる資料について，数を絞って提示し，それぞれの立場から気付きを出し合うことで，より深く事実を理解することができた。

金沢市の進める事業には地域によって優先される順番がある。その順番には，より多くの人が早く恩恵をこうむることができるようにしたいという願いが込められている。資料から読み取ったことを関係づけていくことで，理由と結果に込めた願いを見出すことが，最大多数の幸福を考える思考力を育てていくことにつながる。これは多くの子どもの授業のまとめに資料から分かったことと，既習である金沢市の人口分布の様子をもとにした記述があったことからも見られたことである（資料７）。

② 5年「日本に生活するということ」

(1)－②での話し合いの結果，＜降水量が多いのに，どの家にも給水タンクがあるのはなぜか＞という学習問題ができ，予想について話し合った。

子どもの予想は，大きく二つの観点に基づいて話されていた。

そこで，子どもに，予想が二つの観点に分けられることを伝え，何と何に分かれるのかを考えさせた。

二つの観点に基づく予想とは，「給水タンクは，水不足対策のため」という見方と，「給水タンクは，豊富な降水を有効利用するため」という見方の二つである。

子どもの発言した予想を，二つの観点によって整理すると以下のようになる(資料８)。

A　水不足対策のため

- 給水タンクがあるということは，台風で水が飲めなくなって大変になるから，飲み水を貯めておく必要がある。
- 地図で見ると，那覇の川は短いから，雨が降ってもすぐに流れてしまうから，飲み水が不足するので，水を貯めておく。
- 沖縄は，面積が小さく，浄水場やダムを作るスペースがないから，緊急用に水を貯めている。

B　豊富な降水を有効利用するため

- 雨が多くて水が多いから，その水を貯めておいて利用できないかと考えた。
- (那覇の人々は)雨が多いから，利用できないかと考えたのだと思う。
- 海津町でも，水を利用していたから，きっと沖縄でも利用していると思う。

資料８　二つの観点に分けられた予想

二つの観点に分けて板書し出した後は，自分の考えの観点を明確にして，話させるようにした。

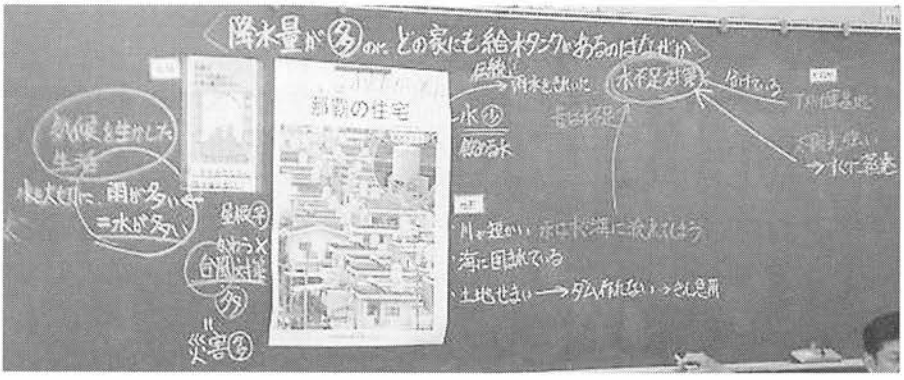
すると，子どもは，自分の意見の立場を明確にして話すだけではなく，違う観点に基づく予想に対しての反論が出てきた。

観点を明確にして話すことにより，子どもは，自他の考えを比べて考え，立場を明らかにして発言するようになった。結果，それぞれの予想についての関係づけと再構成が活性化した。また，再構成されていく考えや根拠を板書に位置づけていった(資料９)。

その後は，自分の主張をより確かなものにするために，既習や地図帳に載っている情報をもとにしたり，自分たちの予想を検証しようとする姿が見られ始めた。

予想の際に，観点を明確にすることにより，自他の考えの比較や統合が行われ、関係づけと再構成が進んだ。

その結果，「予想が正しいか検証したい。」という意欲が生まれ，次の学習活動の必要感が生まれたのである。



資料９　再構成される考えや根拠を板書に位置づける

⑶　考えを比較して，よりよい選択をさせる

５年「日本に生活するということ」

⑵－②で紹介した，予想について検証していく学習活動の場面である。

調べ活動は，子どもの持つ資料集を使って，班ごとに行った。

資料 10　調べながら，互いの考えを関係づけ再構成していく

その際，検証効率を上げるために，班で協力して調べながら，考えたことについて話し合っていった。予想を裏付ける資料を探し，複数の資料を比較しながら，読み取れる情報について検証に役立つものを選び，相手が納得いく説明ができることは，大人が想像しているよりもずっと難しい。難易度が高い学習活動におけるグループ学習の効果は高かった(資料 10)。

調べ考えたことについて話し合う場面では，子ども自らが考えを比較・関連づけ，検証資料や資料から考えられることについての選択を行いながら，考えの再構成を行っていった(資料 11)。

C1：資料集 22 頁を見て下さい。資料②の上の方に，降った雨はすぐに海に流れてしまいますとあるから，給水タンクが備えられているのだと思います。
C2：沖縄には，アメリカ軍用地があるので，そこにも少し分けるので，あると思う。
C3：C1 さんが言うように，降った雨はすぐに流れるので，昔から水瓶で水を貯めていたので，沖縄ではその伝統を今も受け継いでいると思う。
C4：資料集 25 頁の資料④を見て下さい。太陽光による発電をしているということは光が強いということですね。だから，水が蒸発してしまい，水不足になるのだと思う。
C5：C3 さんは伝統と言ってたんですけど，私たちは水不足のために，昔の知恵を真似して作っていると思います。水不足にならないように給水タンクがつけられていると思う。
T ：昔は水不足だったというのは，事実ですね？
C6：今の発言から思ったんですが，昔からタンクがあれば水不足にはならない。だから，それはおかしいと思う。
C7：浄水場やダムがあって，水不足にならないように，今できて，昔は給水タンクがないから，伝統ではないと思います。

資料 11　考えを比較し，より良い選択をしようとしている話し合いの様子

考えを比較させて，よりよい選択が自然と行われていったのは何故か。

一つは，学習問題を作るまでに，那覇の住宅を見て分かることを，じっくりと読み取ったことにより，個人の疑問がみんなで探究したい問題意識に高まったからであろう。

教師が，唐突に学習問題を与えたり，子どもから出た疑問をすぐに学習問題に位置づけたりするのではなく，個々の疑問が全体に共有され，淘汰され，学習問題となって，自然に探究が始まる状態まであせらなかったことが良かったのだと思う。

事実がもつ意味について考えさせたり，観点を明確にして話をさせたりして，子どもの思考に気を配りながら授業を進めることが良いのだとあらためて実感した。

関係づけ再構成する手だてに挙げた三つは，それぞれに独立した手だてではあるが，互いに関係づけ再構成を活性化させる作用を引き出し合う側面をもっていることが見えてきた。

5　成果と課題

(1)　事実がもつ意味について考えさせる

社会科では，確かな事実への認識をもとに，それらを関係づけ再構成していくことによって，社会へ獲得してゆくことが大切である。

３，４年複式では，「３Ｒ運動」という事実がもつ意味について考えさせることで，子どもの意欲的な関係づけを引き出すことができ，結果として学習内容の理解も深めることができた。

５年生では，那覇市の住宅は，「どの家にも給水タンクがある」という事実がもつ意味について考えさせることで，南西諸島の気候などの既習を生かして，事実についての理解や疑問が関係づけられ，学習問題の成立と意欲的な探究が始まっていった。

どちらの実践例も，事実のもつ意味について考えることにより，事実がわたしたちの生活とどのように関わっているのか見えてきたことによって，主体性のある関係づけにつながっていったと考える。

社会科は，初めて出会う言葉や事実が多い教科である。授業において，事実がもつ意味について考えさせることができる時間は限られており，実際の授業では，常に確かな事実への認識や共通理解がされないままに言葉のみが独り歩きして話し合われる恐れがある。必要感に応じて事実がもつ意味について考えさせることは，もちろん必要である。しかし，本時では，どの事実について考えさせることが大切なのか，事実の選択や，資料や調べ活動の工夫などをしながら，授業者は，学習の確かな見通しを立てることを怠ってはならない。

(2)　観点を明確にして，話をさせる

３，４年複式では，「市の政策から社会全体を考える」と「人々の生活」という観点を明確にして，話をさせた。

５年生では，「水不足対策のため」と「豊富な降水を有効利用するため」という観点を明確にして，話しをさせた。

どちらも，話し手に，自分がどんな観点で話そうとしているのかを意識させるためである。

話の観点を明確にすると，子どもは，他の話し手が自分と同じ観点で話すのか否かを判断し，自分の考えと比べながら聴くようになった。それぞれの考えを，関係づけ再構成し，新たな自分の考えを生み出していった。

観点を明確にすることに関連して，観点を板書などで分かりやすく整理することは，関係づけ再構成するための，大きな支援になると感じた。子どもが思考を関連付け再構成する助けになる板書や発問などを重ねていくことにより，自然と観点が明確なる工夫についても考えていきたい。

(3)　考えを比較して，よりよい選択をさせる

５年生では，予想について調べ検証していく場面を使って，考えを比較してよりよい選択をさせることをねらった。

検証ができる資料を探し，予想と資料から分かることとをつなげて考え，相手が理解できるように話すことは難しい。しかし，関係づけ再構成する手だての(1)と(2)を大切にしながら学習を進めたり，班などの小単位による学習活動を行ったりした結果，子どもは，自ら考えを比較してよりよい選択をし始めていった。関係づけ再構成する手だては，それぞれに影響し合い，関係づけ再構成への支援効果を高め合うと感じた。

今後は，予想を検証する場面以外でも，考えを比較してよりよい選択をさせることをねらった実践を行い，研究を進めていきたい。